

1. 実習校について

○実習校名	公立高等学校
○教科	数学科
○担任（学年）	1年
○部活	なし
○その他（校務分掌等）	なし

2. 実習の成果（できたこと、得たもの等）

○授業・教科

1週間は、毎日授業見学を行なった。同じ数学科の先生が多数いらっしゃるの、より多くの先生の授業を見学させてもらった。また、自分が授業をするのは数学Iであったが、数学I以外の数学の授業も積極的に見学に行き、授業のやり方を学んだ。先生によって、授業の進め方が異なり、各先生のやり方というものが先生の数だけあることがわかった。それらの中で何が正解かとかはなく、自分の生徒のために、数ある方法の中から、何を選択するのが大切だと考えた。

自分が実際に授業を実施したのは2週目で5回である。2クラスの数学の授業を連続して行なった。6回目に研究授業を予定していたが、当日、悪天候により臨時休校となってしまったため、実施は叶わなかった。5回の授業では、数学Iの連立不等式と命題を題材に扱った。自分が高校生の時にはなかったICT機器を用いて授業を行った。電子教科書とpptを併用した。2クラスの授業を持っていたため、内容的には3回分の授業を準備する必要がある。また、この2クラスは習熟度別に分かれたクラスのうち、上と下で異なるレベルのクラスであるため、同じ内容でも、教え方や時間配分を考える必要がある。想像していたよりもはるかに授業準備に時間がかかった。実際に授業をしてみると、緊張もするし、言葉がうまく出てこなかったり、頭が混乱してしまったり、準備がいかに重要かを改めて実感した。また、予測していなかった生徒の躓きや進捗具合の時には、臨機応変に対処し、生徒のために今できる最善の選択肢は何なのかを瞬時に判断する必要があるのだと感じた。

○学級経営

1年のクラスに配属された。自分の教科指導の先生が、自分のHRクラスの授業を持っておらず、自分のHRクラスの数学の授業をすることができなかった。そのため、コミュニケーションを取る場面が、朝と帰りのHR、掃除の時間という短い時間だけだった。また、学級日誌の確認とコメントで生徒とのやりとりを行なった。お題を出し、日直に当たっている生徒と文通のように生徒のことを知ることができた。反省点としては、もっと朝の時間や放課後に積極的に自分から話しかけて関係性を深めることができたのではないと思う。朝礼、終礼では、先生からの連絡事項を抜け漏れなく生徒に伝えることが求められた。生徒に伝える前に、まず自分が理解している必要があるため、しっかり担任の先生に確認をすることを心がけた。

○生徒対応

文化祭が近いので、文化祭の準備段階であった。担当クラスは動画撮影をし、MV を作るというものであった。そのため、放課後にどんな動画にするかの話し合いや、実際の動画撮影にも参加し、その中でいろいろな雑談やコミュニケーションを取り、青春の一部を今度は教員という立場から見ることができ、非常に感慨深いものであった。

ロング HR の時間に、コースに分かれて進路を考える時間があった。そこで、私が当時所属していたコースの部長の先生にぜひその時間見学させてほしいと頼みに行くと、逆に生徒の前で先輩として話をしてほしいと頼まれた。クラスの人数以上である 50 人程度の生徒、そして学年とコースの先生方が多く集まっている場面で話す機会を頂いた。とても緊張したが、自分が目の前にいる生徒と同じ時期にどう感じ、どう考え、そして今何を思うかをまとめ、伝えておきたいことをしっかり伝えられたと振り返る。誰か 1 人の心にでも響き、これから頑張ろうと思ってくれていたら嬉しい限りである。

3. 実習ででてきた課題（できなかったこと等）

○授業・教科

わかりやすく教えるという最大の課題はいつまでも付きまとうと考える。なぜなら、対象の生徒にとって、どんな教え方が最適なのかは変わるからである。こちらが良かれと思って、詳しく教えたとしても、シンプルに結論だけ伝えた方がいい場合もある。

関わりがなく、生徒のことを何も知らない人が教壇に立つ難しさも味わった。生徒の特性、いつもの空気感、どうすれば生徒が動くのか、など、経験値でしかわからないことが多いことがわかった。日々のコミュニケーション、生徒指導と教科学習が繋がっていることを実感した。

○部活

自分が部活に入っていなかったこと、スケジュールに余裕がなかったこともあり、部活の指導ができなかった。2 週間という短い実習の中で、研究授業の準備、それまでの日々の授業の準備をすることは、想像していた以上の忙しさであった。1 日の限られた時間の中で効率よく業務をこなすことが求められると考える。

4. 実習を行った感想

2 週間という長いようで短い実習だった。たくさんの先生との関わりの中で、自分が高校生の時に見ていた視点からは別の視点から、教育、現場を見た。授業は教員の仕事の中心であり、どの先生も生徒のためを思い、励んでおられることを間近で感じ、自分もそうでありたいと、生徒のことを思い、授業を作った。担当教員の先生からも多くのアドバイスを受け、それを反映させ、自分なりに改善を毎回重ねていくことができたと考える。また、高校生と関わることは久しぶりであった。教員という仕事は、「生徒の近くで生徒の人生を応援することができる」ことが醍醐味だと考えている。それを、今回の教育実習で味わうことができた。2 週間という短い期間ではあったが、志望校を考える生徒、自分の将来の目標があること、毎日元気に登校し、友人と戯れている姿、文化祭に向けて仲間と作り上げること、全ての場面が私にとって輝かしいものであり、これからは応援したいと心から思った。ただ、実習だけでは見えない部分が

必ずあり、大変なことももっとあると考える。自分がこうありたい、生徒にこうあってほしい、という希望だけでなく、覚悟が必要だと、気を引き締める思いである。